

## 平成21年度学位授与式における学長式辞(平成21年9月18日)

本日ここに集われた学部卒業生および大学院修了生の皆さんに対し、私は埼玉大学を代表し、心からお祝いを申し上げます。また、今日まで学生諸君、院生諸君の勉学を支えてこられたご家族の方々に対しましても、そのご労苦に敬意を表するとともに、心からお祝いを申し上げたいと存じます。

本日、学部を卒業し、学士の学位を得た人は27名、大学院課程を修了し、修士の学位を得た人は7名、博士の学位を得た人は18名です。このなかには学部の早期卒業生が3名、大学院の早期修了生が1名含まれています。また祖国を離れて埼玉大学で研究に励んできた留学生が、修士・博士合わせて15名含まれております。さらに、大学院課程の修了生以外に、学位論文を本学大学院に提出して論文審査に合格し、博士の学位を得られた人が3名います。私は、いずれの人も埼玉大学での研鑽の成果を十分に生かし、それぞれ将来計画の実現に向けて一層奮励努力されるよう祈って止みません。

本日は、新しい旅立ちの記念すべき日ではありますが、本日、2009年9月18日という日に学位授与式を迎えたということは、別の理由で、おそらく何十年経っても皆さんの記憶から消えることは無いに違いありません。それは、一昨日の9月16日、鳩山連立内閣が成立したからであります。総選挙で野党が単独過半数を獲得し、政権交代が行われたのは戦後初めてのことです。日本政治史上のこの大事件は、何十年経っても、語り継がれることになるでしょう。本日の学位授与式はそういう政変の中で行われているのであります。

もちろん、鳩山連立内閣によって日本の政治がどう変革されるのか、それによって日本社会がどう変わるかについては、現段階では断定的なことは言えません。しかし、鳩山内閣がどういう政治を行うことになるにせよ、それ以前に一人一人の投票行動の集合によってこのような政権交代が起こったという事実、そして、そういう政権交代が起こりうるということが日本で示されたということ、そのこと自体が重要なのです。とくに、私は、これまで政治に無関心だと言われてきた皆さん若者世代まで、沢山投票所へ足を運んだということを重く見たいと思います。

このような変化は、世界中で起こっていると言わねばなりません。昨年11月、バラク・オバマが **we can change** と言ってアメリカ合衆国史上最初の黒人大統領に選ばれました。オバマ大統領は早速「グリーン・ニューディール」戦略を打ち出し、また核兵器廃絶の意志も示しています。オバマの政策は、世界の「帝国」として振る舞ってきたアメリカ合衆国が大きく変わるかも知れないという期待を抱かせるものであります。

何故、このような変化が出てきたのでしょうか。産業革命以来蓄積されてき

た環境破壊や核開発を放置するならば、地球と人類社会が破滅するということが誰の目にも明らかになってきたからであります。世界中に格差を広げるグローバル経済の仕組み、世界を経済危機に陥らせたカジノ資本主義も同様です。日本社会で起こっている問題も、少なからずこれらと関わっています。いま、私たちは、持続可能な21世紀社会に向けて、経済、社会の在り方を再デザインしなければならない、既存のシステムと規範を見直さなければならない段階に来ているのです。

皆さんのなかにはこれからも大学で研究に従事する人もいるでしょうが、今日を境に、企業に職を得て活動を開始する人もいるでしょう。また祖国に帰って、国のために働くという留学生もいることと思います。わたしは、皆さんが今後どこで働くことになるにせよ、どこに生活の拠点を構えることになるにせよ、こういう歴史的転換期に新しい人生を歩み始めるということを実感してもらいたいと思います。

ここで、このような歴史的転換期を生き生きと生き抜いていくために、私から皆さんにお願いしたいことが二つあります。一つは、徹底して自分を大事にして欲しいということです。「滅私奉公」という言い方がありますが、自分の身を預け、自分を殺して「奉公」すれば「安心」が得られる、そういう組織はもはや無いと考えた方がいいでしょう。自分を活かすことを追求しなければなりません。自分を活かす武器は現代社会では「知」です。知識基盤社会と言われる所以です。皆さんは埼玉大学で身につけた知識と能力を活かし、さらに学びを深め、「知」に磨きをかけてください。埼玉大学で学んだ皆さんは、学びの方法を身につけたはずです。

しかし、「自分を活かす」ということについては、少し説明が必要です。それは、決して利己的関心のみを追求すればいいということではありません。このことに関連して、市場原理主義的な改革が猛威をふるう中で流布していた謬説に触れておきたいと思います。その謬説とは、経済学の始祖、アダム・スミスが『国富論』で、利己心にもとづいた個人の利益追求行動が社会全体の利益を無条件にもたらすという市場の価格メカニズムを説きあかし、彼はそれを「見えざる手」と言いました。だから、人は自分の利己的利益を追求すればいいのだ、というものです。そして、こうした利己的な経済人のシンボルとしてホリエモンが盛んにもてはやされました。

しかし、アダム・スミスは、人々にこうした利己的な経済人たることを推奨していたわけではありません。彼は、市場を含む包括的な社会の秩序と繁栄に関し、もう一冊の本、『道徳感情論』を書き、そのなかで人間本性の中に「同感 sympathy」があることを示し、その能力によって社会の秩序と繁栄が導かれることを示しているのです。アダム・スミスの「道徳感情論」と「国富論」を一

つの思想体系として描いた本で、2008年度のサントリー賞を受賞した堂目卓生さんが言うように、人間は他人の感情や行動に関心を持ち、それらに同感しようとする、そういう社会的存在です。それは、人間が他人から関心を持たれること、同感されることを望む存在だということでもあります。そして、社会はこのような人間が言語や表情や行為によってお互いに同感する場といえるのです（堂目卓生『アダム・スミス』中公新書、2008年）。

このことに関わって、私は、皆さんに「公共」への配慮をお願いしたいと思います。これが二番目のお願いです。しかし、「公共」とは国家のことではありません。日本では、伝統的な「おおやけ」の観念が社会に浸透し、「公共」は国家や官僚によって独占されてきました。しかし、他人に「同感」し、他人に「同感」されるのは、そういう「公共」ではありません。この十数年の間に盛んになってきた『公共哲学』の研究で言われてきているように、それは生活世界に密着した「市民的公共」とでもいうべきものです。それは、日本では確固たるものとしてできあがっているわけではありません。人々が交換しあう「同感」を束ねる中から、「市民的公共」の規範が形成されるといった方がよいでしょう。今求められているのは、そういう「公共」といわねばなりません。

以上、私は皆さんに二つのお願いをしました。この二つのお願いは、日夜研究室にこもって研究に専念する人については、除外されるように見えるかも知れませんが、そうではありません。こういう人にとって大事なものは、意識的に自分の研究の「for what」を考えること、そこに「公共」への配慮を加えることです。

祖国に帰る留学生の皆さんも、お国の事情に合わせて、「公共」の意味を考えてもらいたいと思います。そして、皆さん全てが、他者に同感し、同感され、そして社会から信頼を寄せられる職業人・市民になっていただきたいと、願っています。

どのような考え方をとるにせよ、この世での人生は一回限りだという点では、誰しも共通しています。その意味で、歴史的転換期に当たり、本日学位を取得された皆さん一人ひとりの将来が幸運に恵まれますように。そして、それぞれに悔いのない人生を送られることを祈念して、私の式辞といたします。

平成 21 年 9 月 18 日

埼玉大学長 上井喜彦